法蔵は世自在王仏に言うんです。「私もあなたと同じようにあらゆる人々を救っていきたいんだ」と。そして世自在王仏に聞くんです。「私の本当の願いは、なんですか」って。

皆さん、どういう願いを持って生きておられますか。例えば病気になりたくないとか。健康で生きたいとか。小さい願いから大きな願いまで、我々の心の中は願いでいっぱいです。ところがその願いが私の人生を貫く本当の願いかって言われたらわからないんです。本当に願ってることは何か、法蔵はわからなかったんです。世自在王仏に聞いた。「私の本当の願い、教えてください」って。

そしたら世自在王仏は「それはお前の問題だから、お前が知ってるはずだ」って言ってます。これ非常に大事なことを言われてる。仏教って答えを教える宗教じゃない。これ基本的なことで、仏さんの教えは最後は自分に尋ねる。お釈迦様は、「自らを依りどころにし、法を依りどころにしなさい」って言ったんです。法というのは真実。真実そのものを依りどころにしていきなさいと。

ところがそれを聞いた法蔵菩薩はこう言い返してる。「この私の願いっていうものは、あまりにも広く深くて自分でもわからないんです」と。僕らは自分のことだから、自分が知ってるやろと思う。ところが私の存在は自分が思ってるよりもはるかに深くて広いんだって法蔵は言ったんです。自分がわかってる自分の姿なんて本当に浅いもんだって言うんです。

そして法蔵は言います。「今までどんな仏様がどんな願いを立てて、どうやってみんなを救っていこうとしたのか、それを私に教えてくれませんか」。さっき一番大事なことは自分に聞かなきゃわからないって言いました。でも自分に聞くって言った例えばトイレに閉じこもってというように思ったら、やうけど、そんなこっちとしたって何も出てこないい。

どうするかというと、法に触れるんです。つまり、今までどんな人たちがこの問題に向き合ってどう考えていったのかを聞いていくんです。聞いて自分に尋ねる。これが自らを依りどころにし、法を依りどころにしろってことなんです。真実によって照らされた私の姿を見ていきなさいって。これは、今皆さんがやってることです。こうやってお話しを聞くということです。聞いて自分が照らされるってことなんです。

親鸞聖人をはじめそれぞれの人たちがいろんな思いを抱えてこの問題に向き合っていった。それらの言葉や歴史を聞いていく。これがお聴聞ってことです。浄土真宗でお聴聞が大事って言われるのは、こういうことなんです。

自在王仏は法蔵菩薩に二百一十億の仏様の世界を見せて、その願いを伝えたって言われます。これがこの後に出てくる言葉なんです。

観見諸仏浄土因　国土人天之善悪（かけんしょぶつじょうどいん　こくどにんでんしぜんまく）

宇宙のあらゆる仏様がどんな願いを立てみんなを助けようとしていったのか、つぶさに見ていく。そしたら法蔵菩薩は気づいたんですよ。これは全部、善し悪しで人を救おうとする世界なんだと。僕ら物事に全部善し悪しをつけたがります。

ものすごく単純に言うと、ちゃんと仏様を信じとったら浄土に行きますよ。疑ってたら地獄に落ちますよ。僕らの仏教観ってそういうもんじゃないですか。救いに境界をつけてしまう。これは仏教に限らず、宗教ってどうしてもそういう性質がある。結局これってみんな善悪の世界のことです。

建立無上殊勝願　超発希有大弘誓（こんりゅうむじょうしゅしょうがん　ちょうほつけうだいぐぜい）

どういうことかと言うたら、法蔵菩薩は自分はこの善悪というものを超えた救いを願いたいって言ったんです。なんで法蔵がそんなこと願ったか。僕ら善人として生きようとしたって生きれないことあります。悪人として生きたくないと思ったって、悪いことしてしまうことあるでしょ。例えば今、ウクライナで戦争してます。妻がよく言います。あんたはウクライナに住んでたら、今頃鉄砲持って戦地に行かなきゃならないねって。

親鸞聖人の時代は平安時代の後期で、飢饉の時代です。人を殺してご飯を取ったりとか、死体がゴロゴロ転がって、いろんな人の生き様を見てたはずなんです。だから親鸞聖人は自分のことこう言ってます。「さるべき強縁のもよおさばいかなる振る舞いもすべし」。自分の生き様を自分で選べない。善人と言い切れるものが救われていくのならば、悪人は見捨てられることになります。でもお釈迦様はそういうこと決してしなかった人なんです。

阿闍世王は権力を握ってあれだけ人々を殺して、自分の父も殺して、少しも反省もしない。一番救われないやつだ。それを一番最初に救わなければあらゆる生きとし生けるものが救われる道は絶対に開けないって言って、お釈迦様は阿闍世を一番先に救おうとする。

法蔵は言うんです。善悪によって人を隔てない救いをしていきたいんだ。そういう願いを立てたいんだって。それを聞いた世自在王仏は、「そんなことをもしするんだったら、あなたは永遠に修行し続けて、仏になれなくなるよ」って言ったんです。ところが法蔵は自分の救いを放棄するんです。

「私は善悪を超えた救いを願いたいんです」って。

あらゆるものを超える願いってことなんです。その願いは言葉になるという願いだったんです。人間は言葉で迷ってるゆえに、言葉を拒絶することができないって気づいた。だから、法蔵は「言葉になって、その言葉をもって宇宙を満たして、そして目覚められない人を永遠に私呼び続ける」って言った。その言葉とは何か。私は「南無阿弥陀仏」という言葉になる。気づくまで、目覚めるまで私は永遠に呼び続けるって、言葉になって我々に接しようとした。

言葉だから、言葉が届くか届かないかですから、人間の善し悪しも関係ない。長生きした人も早死にした人も、男も女も、貧しい人も富んだ人も、あらゆる人はみんな同じ言葉をもって接する。そういう願いを立てた。これが「南無阿弥陀仏」という言葉なんです。こういうことが「正信偈」に説かれてます。ずっと読んでたら「本願名号正定業」が出て来るんです。名号ってのは名前や言葉のことです。私は名前、ナムアミダブツという言葉となって人を目覚ますっていう、その願いを成就したんだって「正信偈」では書いております。というわけで、今日のお話はこれで終わります。

（2022年10月4日法話後半抄録）